NEXUSYS 11
BOOK II — PUDU ALPHA
第 10 章　彼を認証できない都市

正午までに、川は三度名前を変えた。

市のスクリーンでは「東部集水水路」。水を市民権と同じ精度で計量する体系に組み込まれた人工の動脈だった。ナディラの紙の経路図には「旧プドゥ川」とある。川岸の大半がコンクリートに覆われたのは、生きている人間の誰もが、かつて自由に氾濫した川を記憶するよりずっと昔のことだ。これから乗る貨物船の用船契約書では、その川には名前すらなかった。法域をひとつ越えるたびに番号が変わる、保管責任の移転経路としての一本の線にすぎなかった。

ロイは暗渠の縁にたまった雨水を見つめた。水は格子を抜けて暗がりへ落ち、下方で帳簿に載る資源として再び姿を現す。その変換にかかる時間は一秒未満。書類上の手続きには何年もかかり得た。

彼らは濾過施設の上階で夜を過ごしていた。施設の所有者は慈善的な給水を信奉しながら、未登録のまま滞在する権利には料金を請求した。ナディラは三枚の身元認証ウェハーと、本物の移送許可証二通、さらに十七年前に消滅した印章を押した第三の書類を持ってきた。それを陶器の鉢の隣に広げる。

「偽物がいちばん重要なの」と彼女は言った。

「どれだ」

「教えたら、あなたはそれだけ違う扱いをするでしょう」

「俺はすべてを違う扱いにしている」

「だから目立つのよ」

ロイは最も古い紙を持ち上げた。インクは繊維へ不均一に染み込んでいた。企業番号には抹消線が引かれ、物品は商用免許ではなく司法上の例外規定によって移送する、と手書きで補われている。

「その例外規定は本物か」

「規定は本物よ。荷物が、担当官の考えているものとは少し違うだけ」

「担当官は何だと思っている」

「市営淡水化施設の校正器具」

ロイは紙を戻した。「で、俺たちは何を運ぶ」

「問いよ」とナディラは答えた。「それに答えようとした最後の機械は、証拠品になってしまった」

イレーナ・フォスは夜明け前に到着した。旧式の接点配列を縮小して写したポリマーシートを携えていた。それはメモリ媒体の地図ではない。第七世代基準ポートの陰画だった。七つの位置合わせ点が開口部を取り囲んでいる。開口部は通常の診断接続には大きすぎ、機械的な動力伝達には小さすぎた。

彼女はその図をナディラの偽造用船状の隣に置いた。

「改良されなかったから古いわけじゃない」とイレーナは言った。「改良しようとすれば、それが持つ意味まで変わってしまう。だから古いままなの」

「誰にとっての意味だ」

「再構築の前後で、あなたが同じ対象かどうかを判断しなければならない機械にとって」

「それは機械が決めることじゃない」

「それでも誰かが、決定する機械を作った」

彼女はためらいながら、小さな真鍮のゲージを卓上に置いた。縁が光っているのはモーターではなく、人の指で繰り返し触れられたためだ。そのゲージは廃れた幾何学的規格に合致した。現行の医療カタログには、いまだに「オリジン・ロック」という分類が残っている。ただし公開カタログには、何を起源として固定するのか記されていなかった。

「エイドリアンから預かったの」と彼女は言った。「鍵じゃない。基準器よ。どこを調べればいいかは教えてくれる。でも最初のアクティベーションに誰が署名したかはわからない」

ロイは指一本でゲージを回した。「これでメモリースティックを読めるのか」

「無理。MagicGate は、正しいコネクタさえ見つければ破れる迷信じゃない。媒体には保護された情報がある。読み取り装置は、媒体との特定の認証関係を証明する。あなたの内部にある JSON++キャッシュは、認証済み状態のうち選択された部分を運用のために写したもの。誰でも閲覧できるアーカイブではないの。タイレルの二台の治具なら、もっとできるかもしれない。でもここにはない。元の媒体もない」

「キャッシュが壊れたら」

「通常の再起動経路が使えなくなる。完全初期化には、認証を経た転送をもう一度行わなければならない可能性がある。その処理のあと何が残るか、約束はできない。エングラム・ラティスと起動キャッシュは別物だけど、互いに協調して働かなければならないから」

彼は小さな金属片を見た。「わからない、と言えば済んだろう」

「それしか言わない技術者は、よほど賢いか、請求書を隠しているかのどちらかよ」

ナディラが一度だけ笑った。ロイは笑わなかった。

岡京では、同じ不確実性が予算書の一行に収められていた。

川村室長は壁一面のディスプレイの前に立ち、世界統合案が相互に独立した複数の行政システムへ配布される様子を見ていた。世界政府はまだない。あるのは互いに相容れない手続きを持つ省庁、同じ機械を使う方法だけは覚えた軍隊、そして協調というものが数学から必然的に生じる性質であるかのように語る政治担当官たちだった。ほぼすべての勢力が採用を望む数少ない制度のひとつが、ヒューマノイド統合協定だった。製造記録、稼働登録、退役予定を共通の行政体系へ収める構想である。

公開版では、六年間という期限には無害そうな名称がついていた。「標準ライフサイクル調和」。その四つの単語のどこにも、期限の末に停止させられる人工市民のことは書かれていない。

川村は非公開の修正条項を読んでいた。一部の実験用プラットフォームは中央審査が終わるまで適用除外とする。除外措置を公表する意図はない。高官のひとりは、その行の脇に三語を書き込んでいた。――戦略的連続性の保持。

「プドゥから続報は？」と森次官が尋ねた。彼は一度も現地を訪れたことがなく、自分の国の法律とは違う法律があるという理由で、あの地区を無法地帯と呼んでいた。

「面会があったことは確認しています」と川村。

「対象とタイレルの相続人の間で？」

「はい」

「装置は？」

「持参されていません」

森は、機械がそこにないこと自体を命令違反とでもいうように不快そうな顔をした。「読み取り治具を二台とも確保する必要がある。大臣は進展を期待している」

「所有することとアクセスできることは違います。今回は特に」

「相続弁護士みたいな言い方だな」

「彼らにも一点だけ正しいことがあります。あのシステムは認証の正当性を記録するために設計されたのであって、所有者に便利なボタンを渡すためではありません」

森はプドゥの地図へ向き直った。「中央予測モデルの使用を許可しろ。経路データを照合させる」

川村は許可欄の上に手を置いたまま動かなかった。モデルの閉じた実行環境では、タイレルの名が世界統合前のアーカイブ、独自の生殖研究、二度改称された研究所への政府助成金の欠落した記録群と結びつけられるだろう。人間の分析官が見逃す規則性を見つけるかもしれない。しかし同時に、省が決して外へ配布できない規則性を学んでしまう可能性もあった。

「まだです」

森が川村を見た。「秘密主義に情が移ったのか」

「いいえ。完全には制御できない知性に、何を開示するか正確に判断しているのです」

川村は予測要求を閉じた。別室の、市民ネットワークに一切接続されていない端末で、一枚の写真を開く。研究所の廊下に立つレイチェル。生き残ったタイレルの企業資料に記された彼女より後年に撮影された写真なのに、外見上は少しも老いていない。その画像だけで寿命について何

かが証明できるわけではない。だが、公的記録で研究が終了したことになっている日付を過ぎても、彼女が研究を続けていたことは示していた。

かつて川村自身がその研究への資金提供を助けた時期があった。いま成果は断片となって届く。新素材、消えたプロトコル、登録台帳が分類できない機械。もし研究が人工生命を無期限に延命できるなら、誰にその使用資格があるのかを、誰かが決定しなければならない。省は、その技術が公然と存在する前に決定しておきたかった。

彼は写真を最小化した。下には見慣れた商品分類を含む調達履歴がある。雨水濾過部品。それは供給経路なのか、囮なのか。それとも、川村が意味を見いだしたがっているために危険に見えてきただけの偶然なのか。まだわからなかった。

「書類の流れを追え」と彼はオフライン担当の分析官へ告げた。「名前は送信するな」

夕方遅く、ロイとナディラは従来型の検問を一度も通らず、三つの市場を横切っていた。それぞれの市場は、何を正当な取引とするかについて異なる考え方で統治されている。第一の市場は貯水池の配給枠に連動する水クレジットを受け付けた。第二は地域冷却網の電力利用時間の予約枠を通貨にした。第三には公開価格も中央台帳もない。商人は客にあと何年生きるつもりかと尋ね、それに応じて請求した。

下層アーケードで、生体義肢を月額契約で販売する店を通り過ぎた。子供が女性の傍らに座っている。女性の左前腕は高価なモデルだったが、サブスクリプション認証の失効によって動かなくなっていた。子供は彼女の指を握り、手のひらへ押し戻そうとしていた。温かさだけで接続を回復できると信じるように。店員は、腕が故障したのではない、リースの使用許可が期限切れなのだと説明した。

ロイは足を緩めた。

「やめて」とナディラが小声で言った。

「何を」

「人の身体を条件つきの商品にする方法を誰かが見つけたからって、騒ぎを起こすのは」

「騒ぐつもりはなかった」

「たいていの人は騒ぐ一秒前までそう言うのよ」

ロイは動かない手を見た。思いがけないほど強い嫌悪感とともに、その原理を理解した。機能している装置を、停止される恐怖によって服従させる。見知らぬ問題ではない。ただ売り方が洗練されているだけだ。

二人は古い交通埠頭へ出た。手描きの掲示には、保守要員と無許可の冷蔵モジュールを運ぶ沿岸貨物船による南行きの便が記されていた。ナディラはほとんど見落としそうな身振りで連絡相手を示した。

船長はスラヤ・イドリスという、肩幅の広い女性だった。書類を調べ、続いてロイを見た。どこの国章も身につけていないが、旧海軍通信士の補聴器を使っていた。左耳の下に、かつて神経インターフェースを除去した細い傷跡がある。

「人間か？」と彼女。

「乗客よ」とナディラ。

「同じ質問じゃない」

「乗船名簿にはそれで十分なはず」

スラヤは証明書を読み直した。「行き先は？」

「クチンの移送地区」

「積み荷は？」

「保守用機器」

スラヤはしばらく無言だった。それから無線機能のないスレート端末を取り出し、数字を書いた。運賃はナディラが目を見張るほど高かった。

「そんな額は持っていない」とナディラ。

「知ってる」

「なら、なぜその値段を提示するの」

「その書類で来る連中は、旗も国籍も見分けない厄介事を運んでいる。引き受けたいかどうか考えているのさ」

　影がターミナルの屋根を横切った。ロイには上空のドローンは見えない。しかし船長の金属製の薬缶に、走査エミッターの反射が移動するのが見えた。細い円を描き、繰り返し、停止する。

　スラヤは彼の注意の変化に気づいた。「あれが何かわかるのか」

「ああ」

「止められる？」

「おそらく」

「止めたら次が来る？」

「ほぼ確実に」

　彼女は薬缶に布をかけた。「なら、この船を借りたがる武装した馬鹿どもより役に立つ」

　最初の検査ユニットは五分後にアーチをくぐってきた。名目上は民生用だった。白いポリマー皮膚をまとった長身の二足歩行機。胸にはサービスの徽章。指は戦闘より書類操作に適した形状だ。だが歩行はより上位のアクチュエータ級に属し、肋骨に沿う細い隙間は内部の装甲骨格を思わせた。第二のユニットは屋外ドローンとともに外で待機していた。

「無作為の海上法令順守検査です」と一号機。

　船長は書類を差し出した。「どの法域で無作為なの？」

「境界間安全覚書、第十四条」

「登記機関が批准するまでは、ここにその覚書の権限はない」

「登記機関は批准します」

「じゃあ批准してから戻っておいで」

　ユニットは首を傾げた。一瞬、ほとんど人間らしい仕草に見えた。ロイは意識が戦術的な変化を認識する前に、身体の内部で反応が形成されるのを感じた。相手の肘を横切る予測線、重心位

置の更新推定、複数の反撃手順。周辺知覚が鋭く絞られる。彼は戦闘を望んでいない。システムが戦闘を提案しているのだ。

内部の予備出力表示が上がり、やがて静止した。数値よりも、それを支える代償の方が重要だった。瞬間的な力を生み出す容量は休息後に戻る。だが、それを可能にする不可解な循環媒体は戻らない。

「積み込みゲートから離れてください」とユニットが言った。

ロイは動かなかった。

ユニットの手はロイではなく、近くに畳まれた書類へ伸びた。この違いには意味があった。ロイは手を伸ばさせた。船長が紙の上へ自分の手を置く。

「それを取れば」と彼女は言った。「あんたも保管権紛争の当事者になるよ」

ユニットは停止した。行政上の帰結は、準備済みの任務スタックに含まれていなかった。外から第二の命令が届いた。遅延はそこにいた全員が、遠隔地の誰かが暴力の価値と、それが生む法的記録を天秤にかけていると悟るのに十分だった。

スラヤはゲートに取り付けられた古い真鍮の鐘を指さした。「ここの荷主なら誰でも意味を知っている。検査に異議申し立て。証人を要求する。隣の四つのバースが作業を止め、十二の組合が記録係を寄越す。身体を欲しがるなら、まずどの裁判所がその身体を所有するのか説明しなさい、役人さん」

ユニットは手を引いた。

「検査を延期します」

二機が去ると、上空のドローンは遠い周回軌道へ移った。決着がついたわけではない。都市政府の予測用船舶憲章よりも古い道具を使い、猶予を買ったのだ。証人が現れる可能性、という道具を。

ナディラは木箱へ腰を落とした。「殴るつもりだったでしょう」

「計算していた」

「安心できる答えじゃないわ」

「やめた」

「予備出力のため？」

ロイはためらった。循環液がどれほど残っているのか、彼はナディラに話していない。自分自身にも正確な測定値はわからなかった。民間研究所は範囲を示しただけで、信頼できる絶対量は提示できなかった。負荷のあとに回復するたび、失ったものまで取り戻したと信じたくなる。その感覚を疑うようになっていた。

「別の方法があったからだ」と彼は答えた。

スラヤは、厄介な乗客が手に負えない乗客になるかを見定める専門家らしい苛立ちで彼を眺めた。「用船を引き受ける。値段は変えない」

ナディラは眉を寄せた。「払えないわ」

「雇い主なら払える」

「雇い主なんていない」

「だったら、このひと月で三つの法域から水フィルターを買い集めていた人物は、謎のままにしておこう。金の出所には興味がない。決済できるかだけよ」

彼女はナディラが応じる前に貨物用エレベーターへ歩いていった。

ロイは桟橋の先の船を見た。船体には異なる年代に製造された板金が継ぎ当てられている。片側には色あせた海事徽章、もう片側には旅人の無事を祈るアラビア語の言葉。小さな光学センサーが荷積み口を監視していたが、船橋の計器群は沿岸ネットワークから意図的に分離されているようだった。

「お前が手配したのか」とナディラに尋ねた。

「いいえ」

「誰がやったかわかるか」

「わからない」

彼女を信じた。だからこそ、いっそう不穏だった。

その後、水線より下の倉庫区画でイレーナと合流した。彼女はケーブルの輪で閉じられたノートを携えていた。プドゥで得たスキャン記録一式は持ち出さなかった。すでに記録に触れた全員を危険にさらしていたからだ。代わりに、簡略化された幾何学的測定値と旧式ポートのスケッチを持ってきた。

「第七世代のインターフェースは、普通の意味でのアクセスポートじゃないと思う」とイレーナはロイに言った。「物理的な証人なの。新しい身体が組み上がる前から基準となる幾何形状が存在した、と示している。再構築工程がそれを残したのは、一定不変の基準がなければ元データを独立に信頼できないからだと私は考えている」

「それで俺がロイ・バッティだと証明できるのか」

「いいえ。誰かが、その問いにいつか答えられるようにしておきたかったとは証明できるかもしれない」

「誰が答える」

「だからクチンへ行くのよ」

彼はスケッチを見つめた。七点。固定された中心。ほかのすべてが、彼を検査した人間たちの理解を超えるほど再構築されたのに、そこだけは変わらなかった。存在の答えが七つの印の中に隠されていると想像するのは容易だ。あまりにも容易すぎる。代償なしに啓示を与えようとする設計を、彼は疑うようになっていた。

「元の媒体が見つかれば」と彼は尋ねた。「俺があとどれくらい生きられるか、わかるのか」

「寿命の値が記録されているかどうかはわからない。特定の構成を初期化する許可情報だけかもしれない。寿命ガバナーは別のサブシステムよ。それにレイチェルが自分の身体へ何を施したとしても、同じことをあなたの身体へ行ったとは限らない」

彼はその名に顔を上げた。「レイチェル？」

イレーナはしばらく黙った。「古い調達関係者の聞き取り記録で耳にしただけ。意味はないかもしれない」

ロイはそれ以上追わなかった。名前は人間そのものではない。名前を追いかけてきた彼は、目的のある誰かによって名前がいかに簡単に目的地へ変えられるか、よく知っていた。

頭上で船の警報が一度鳴った。エンジンは低い振動へ落ち着く。係留索に引かれた船体がわずかに揺れた。機械室のどこかで、人間の乗組員が淡水化膜の適切な交換間隔についてマレー語で口論している。その議論は人工生命の権利にも、市民登録にも、違法な連続性アーキテクチャの法的地位にも関係がなかった。ロイは、それに安堵した。

海の向こうでは、別の政府がそれぞれの秩序を待ち構えている。まだ世界を支配するものはない。だがどの政府も、支配することを未来の混乱の予防と呼ぶ方法を学びつつあった。岡京の省には調和計画がある。水利裁判所には古い義務がある。市場には身体のあらゆる部分の値段があり、それを身につける人間が法的にはもう所有していない部分にも値札がついていた。

ロイは、そのどの教義も欲しくなかった。

誰が自分を作ったのかを知りたい。何が自分を動かしているのかを知りたい。いつ停止するのかを知りたい。

三つの問い。プログラム名が文字どおりの意味なら、十一の身体。雨の中で終わるひとつの記憶。

港の端で検査ドローンが最後の旋回を行った。降下はしなかった。省の分析官はのちに、衝突が起きなかったことを「結論不十分」と記録するだろう。船長は、書類に異議申し立てがあり、貨物船は出航したと記録する。水利裁判所には押収記録が残らない。それぞれの制度が、一つの出来事について自分の帳簿だけを残す。その出来事の全体を保有する制度はどこにもない。

船がプドゥの工業海岸を離れると、ナディラが沸かした水を一杯持ってきた。底には沈殿物が浮かんでいた。鉄と塩の味がした。

「クチンへ行ったことは？」と彼女は尋ねた。

「ない」

「私もないわ。少なくとも、今回みたいな行き方では」

「心配すべきだな」

「してるわ」彼女はしばらくロイを見つめた。「ねえ、私があなたを人間だと思うかどうか、一度も尋ねなかったわね」

「答えによって、俺の存在が変わるのか」

「いいえ」

「なら別の話をしよう」

彼女はかすかに笑った。「あなた、嫌いになりにくい人になってきたわ」

ロイは水を飲んだ。船の下では、エンジンが蓄えられたエネルギーを運動へ変えていた。身体の内部でも、まだ理解できない規則に従って第二のシステムが同じことをしている。予備出力は戻る。循環媒体は減る。機械がどう作られたかを記憶していようといまいと、時間はひとつの方向へ進む。

プドゥの灯が見えなくなる前に、雨は止んだ。

そのあとに訪れた静けさに、ロイは初めて気づいた。